

海を詠う

岩井圭也

第五話

第三章 墜おちる海

五月の銀座には、埃ほこりっぽい風が吹いていた。風はブラウスの襟えりをはためかせ、どこかへと去っていく。

昼遅い時間、老若男女が銀座の雑踏ざつたつを歩き交っている。ぴかぴかのステッキを持った老紳士。田舎臭い羊羹色ようかんの着物をまとった女性。片足を引きずったみすばらしい身なりの男。三、四歳の子どもの手を引く母親。

誰もが、銀座という舞台の上で役目を演じているようだった。ぱん、と手拍子が響くのを合図に、みんなが役から降りて素の表情に戻っていく。そんな、あり得ない妄想がわたしの頭を占めていた。

通りを進むと、日本昼夜銀行にほんちゆうやの立派なビルディングの隣にある、寂れた木造三階建てのアパートが見えてきた。一階は酒屋になってる。棚をいじっていた主人の奥さんに「こんにちは」と声をかけてから、店先の隅にある細い階段に足をかけた。薄い木の板は、踏むた

びに、ぎい、と鳥肌が立つような音を鳴らす。いつか本当に抜けてしまふんじゃないか、と気が気じゃない。

二階に上がると、廊下を挟んで二つの部屋がある。向かって左手の部屋には入ったことがない。兄がいうには、どこぞの芸者さんが住んでいるらしい。ごくたまに、その芸者の相手と思しき男の人が出入りしているそう。右手の部屋の住人は、わたしたちの仲間らしい。名前だけは知っている。

またぞのかつえ
北園克衛。

北園さんに会ったことはないけれど、北園さんの詩は読んだことがあった。兄が貸してくれた雑誌に掲載されていたその詩は、やらと難解だった。結果として難解になった、というより、難解であることそのものに価値があるような文章だった。兄は北園さんの作品を、「アヴァンギャルド」とか「実験詩」とかいった言葉で評していた。

——そもそもこれを、詩と呼んでいいのかはわからないけど。

そうこぼす兄の顔には、一抹の困惑があった。わたしはほとんど反射的に、ムキになって抗った。

——なら、どんなものが詩だっているの？

突然激昂した妹に、兄は驚いていた。わたし自身、驚いた。

いまなら激昂してしまっただけがわかる。たぶんわたしは、特定

の形を持たなければ詩だと認めようとしない、兄の偏屈こまじおさに憤いらったのだ。

そもそもこれを、詩と呼んでいいのかはわからないけど。その台詞は、北園さんの作品にだけ向けられたものではなかった。直接口にしたことこそないが、兄がわたしの作品をそう評していることはわかっていた。昨年書いた〈昆虫〉が、いまだに目の目を見していないことからあきらまかだった。わたしの詩は〈文芸レビュー〉にも、兄がかかわる他の雑誌にも掲載されていない。

百田ももたさんに相談すれば、きっとどこかの雑誌には載せてくれるだろう。けどそれも気が進まなかった。萩原はぎわらさんとの縁談の件があったからの一時期、百田さんの宅からは少し足が遠のいた。その後、兄がきつぱりと断つたために縁談は立ち消えとなったが、やはり前ほどには通わなくなった。

その兄には、一度も詩を見せていない。わたしが書いていることは知っているようで、たまに物言いたげな顔をすることはあっても、見せろ、とは言われなかった。

だいたい、本当に認めてほしいのは百田さんや兄ではない。伊藤いとうさんが、伊藤整せいが認めてくれなければ、なんの意味もない。

二階の廊下を進み、身かがめて、さらに幅の狭い階段を上る。三階は天井が低いことから、わたしたちのあいだで「屋根裏部屋」と呼

ばれていた。そしてその屋根裏部屋こそが、文芸レビュー社の本拠地だった。

階段を上がりきると、まず〈文芸レビュー〉と大書された看板が出迎えてくれる。つくったのは、常連の書き手の誰かだったはずだが忘れてしまった。その横には空になったビール瓶が数本、立てられている。一階の酒屋で購入して、ここで飲んだのだろう。屋根裏部屋ではしよっちゆう宴会が開かれている。

「ただいま戻りました」

声をかけると、三畳間さんじょうまにいたふたりの男性が振り返った。返品された大量の雑誌に埋もれているのが兄で、ちやぶ台に向かって原稿を読んでいるのが伊藤さんだった。伊藤さんはよっぽど集中していたのか、こつちに向けた顔には険しい表情けわを貼り付けたままだった。

「お帰り。早かったね」

ねぎらいの言葉をかける伊藤さんの顔は、徐々に緩ゆるんでいった。

「郵便局が空いていたんで」

「助かったよ、ちかちゃん」

「とんでもないです」

自然とこちらの表情もやわらかくなる。兄は雑誌の山の隙間すきまからわたしたちを見て、意味ありげに鼻を鳴らした。

「どうかしたの、兄さん？ なにか言いたげだけど」

「いや、別に」

兄はぶつきらぼうに答えて、手元に視線を落とした。どこかへ手紙を書いているようだった。また広告出稿の依頼だろうか。

昨年しんねんの春に始動した〈文芸レビュー〉は、わたしの目にはまざまざの滑り出しに見えた。二十代の若い書き手が集まり、誌面を開くだけでむっとした熱気と青臭さが立ち上ってくるようだった。わたしが翻訳したモルナールやアンダーソンの小説も、毎号のように掲載された。もちろん、どれも伊藤さんの指導を受けながら訳したものだった。四月には、兄の主催で講演会が開かれた。

けれど、誌面に横溢おおいする熱気とは裏腹に、兄の表情はすぐれなかった。

立ち上げ当初からわかっていたことではあるが、資金繰りは順調じゆんたうとは言えなかった。ほとんどの書き手はそんなこと知らないだろうけど、編集補助として会計の手伝いをしているわたしはよく理解していた。印刷費や郵送費はばかにならないし、わたしや伊藤さんは別として、名がある書き手に書いてもらうための原稿料も相応にはかかる。兄は貯金を切り崩しているようだけれど、ただでさえ同郷の後輩たちの面倒を見ているため、活動に割ける予算は潤沢じゆんたくとはほど遠い。雑誌そのものの売上額も微々たるもので、自然、雑誌広告の出稿料だけが頼りだった。

雑誌の山の向こうから、うめき声が聞こえる。こっそり覗くと、兄が便箋を前に頭を抱えていた。文面への迷いというより、もつと根源的な葛藤を感じさせた。

「頭でも痛いのかい？」

伊藤さんが、ちゃぶ台の原稿から顔も上げずに問うた。兄が「うん」と低くうなる。

「これからの雑誌のことを考えていたら、頭痛がした」

「気に病む必要はないよ」

経営に頭を悩ませる兄と対照的に、伊藤さんはどこか楽観的だった。伊藤さんは編集面での責任者として、掲載される作品の内容にこそ責任を負っているものの、売上や収益といった数字はあまり見えない。危機感に差があるのは仕方のないことだった。

「そうはいつでも、銭がなければいずれ雑誌は出せなくなる」

「そうなったら、また石鹸でも売って稼げばいい」

「小樽おたるにいたころとは違うぞ」

兄の声は小さいが、決然としていた。

「〈文芸レビュー〉を日本文壇を代表する雑誌にするには、こんなところでつまづくわけにはいかないんだ。失敗すればやり直せばいい、というものではない」

「そうかな。ぼくは、見所のない雑誌を延命えんめいさせるほうが仁義にも

と思うけど」

伊藤さんの返答は、楽観的を通り越して、ほとんど他人事だった。さすがに兄も聞きとがめた。立ち上がり、半端に伸びた頭を見せると「おい」と呼びかける。

「その雑誌を編集しているのは整だろう」

「そうだよ」

ふたりのやり取りを、わたしは隅で小さくなって見守っているしかなかった。兄が舌打ちをした。

「なにを平然と。責任の一端はきみにもある」

そう告げると、伊藤さんの顔つきが一変した。獯猛どうもうさをむき出しにして兄をにらむ。その横顔は、かつての伊藤さんを思い出させた。

伊藤さんのお父さんが亡くなった日も、こんな鋭い目つきするどをしていた。

「昇のぼは、金になる雑誌をつくれ、と言っているのか？」

「それは……」

「〈文芸レビュー〉は必ず成功する。万事問題はない」

勝手に言い捨てて、伊藤さんは原稿に向き直った。兄はやるせない顔でわたしを一瞥いちめつし、額に皺しわを寄せて、また雑誌の山に沈んだ。

最近、伊藤さんの様子はあきらかにおかしい。ぼうつとしていることが多く、仲間の呼びかけにも空返事をするが増えた。かと

思えば、さっきのように不用意な発言をした挙句、逆上してみせる。穏やかな微笑は消え去ってはいないが、以前に比べると見かけるところが減った。

その変化は、詩が書けないことと無関係ではないはずだった。

五月の〈文芸レビュー〉に、伊藤さんは〈感情細胞の断面〉という作品を発表した。詩ではなく、小説だった。

伊藤さんの小説への転向を、兄が快く思っていないことは手に取るようにわかった。いつもなら伊藤さんの文才を大っぴらに褒める兄が、〈感情細胞の断面〉について一度も言及しなかった。だが兄がどう思おうと、最終的な編集の責任は伊藤さんにある。掲載を認めないわけにはいかなかったのだろう。

小説の出来の良し悪しは、率直に言って、わたしにはよくわからなかった。宴会での会話を漏れ聞くところによれば、心理小説なるものを目指して書かれたらしい。小説内のおよそ半分は漢字とカナが混ざった文体に占められ、重要なかそうでないのかも不明なまま、日々の雑事が日記調で記されている。

最初に浮かんだのは、これは小説なのだろうか、という疑問だった。しかしその疑問はすぐに打ち消した。わたしが詩を定義づけるのを嫌うように、伊藤さんだって、小説を定義づけられるのは嫌だろうと思っただけから。

伊藤さんの様子がおかしくなったのは、この作品が掲載される前後だった。

わたしはしばらく、三畳間で部屋の掃除をした。編集補助としてやるべき急ぎの仕事はなく、はつきり言って手持ち無沙汰だった。それでも家に帰る気にはなれなかった。

退屈しのぎに手を動かしているのがばれたのか、兄が「ちか」と呼んだ。

「きょうはもう帰っていいよ。ご苦労様」

「もう少し片付けていくから」

「夕方から衣巻きまきさんが来るんだ。ちかには退屈だろうから」

衣巻さんは、しょっちゅう文芸レビュー社に出入りしている書き手のひとりだった。

わたしは無言で抗議する。兄に悪気はないのだろうが、文学的議論から仲間外れにされるのはあいかわらずだった。それはわたしが女であることと、無関係ではないだろう。わたしこと「左川ちか」の名は、訳者として幾度も誌面に掲載されている。文学に関わっている以上、議論に加わる資格はあるはずだ。それなのにまともに相手にされないのは、性別のせいとしか思えなかった。

「そう冷たくするなよ、昇」

伊藤さんがまた口を挟んできた。

「ちかちゃんだって、〈文芸レビュー〉の同志だろ」

「ぼくは疲れただろうと思って言ったんだ」

「むしろ家に帰ったほうが、ちかちゃんは疲弊してしまうんじゃないかい？」

無理にかさぶたを剥がしたときのように、胸の奥がじくじくと痛む。兄は「うん？」ととぼけた答えを返したが、伊藤さんが言外にこめた意味に気がつかないほど、兄は愚鈍ではない。わかっているとぼけているのだ。

兄は昨年九月、小学校の先生と結婚した。結婚式を挙げたのは、百田さんの家の二階だった。

クラという名の義姉は、本音をずばりと言う人だった。兄が世話をしている後輩が粗末な服装をしていると「不潔な身なりで歩かないで」と叱責し、金欠の者がいれば「夢は諦めて故郷へ戻ったらどう？」と求められてもいない助言をした。いずれも、悪意から発している言葉でないことはわかる。義姉はただ周囲の人たちに、いまよりよい人間になるための方法を教えているつもりなのだ。ただ、義姉の考える「よい人間」は、当人にとっては必ずしも「よい人間」ではなかった。

居心地の悪くなった下宿人は、なにかと理由をつけて、ひとり、またひとりと中野の家を出て行った。根上の律ちゃんはまだ残っている

るけど、義姉の言動に辟易へきえきしているのは訊くまでもなかった。

はつきり言って、わたしも出て行きたかった。義姉は郵便局の仕事もそこそこに、文学などという正体不明の道楽にうつつを抜かしているわたしを快く思っていないらしく、家のなかですれ違った折などに、たびたび小言を口にした。あなた、そんな生活じゃ嫁のもらい手がなくなっちゃうわよ。そんなことを平然と言い放つ義姉が、好きになれるはずがなかった。

自然、自宅にいる時間は減った。昨年末に兄夫婦と世田谷の家へ引越してからは、よりいっそう、外をふらふらするようになった。とはいえ、金欠のわたしが行く場所は限られている。職場の他にはこの屋根裏部屋か百田さんの宅、あるいは――。

「いいんです。わたし、帰ります」

勢いをつけて立ち上がり、スカートの裾を払った。伊藤さんが、目を細めてわたしを仰あおいだ。

「気をつけてね」

「はい」

短いやり取りだったが、なにかを悟ったように伊藤さんが笑った。わたしも兄に気付かれない程度の微笑を返した。

階段を下り、一階の酒屋から銀座の通りに出る。

舗道を歩いて角を曲がると、ちょうど、くすんだ車体のバスが目

の前を通り過ぎていった。車内には紺の制服を着た女学生が、十人ほど詰めこまれていた。窓の外を見て騒いでいる生徒が多かったが、そのなかのひとりには、ぼんやりした顔つきで通りを眺めていた。その生徒と、目が合った。

小さく手を振ってみると、はっ、と彼女が息を呑んだのがわかった。バスが轟音ごうおんとともに去っていく。

つい二年前まで、わたしはあちら側にいた。きらびやかな東京の街並みを颯爽さつそうと歩いてみたい、と願っていた。その願いは叶った。残念なのは、わたしの隣に伊藤さんがいないことだけだった。

そのアパートには、靴脱ぎ場から上がってすぐのところ揺り椅子がある。こういうものがあると聞いたことはあったけど、実物を目にするのはこれが初めてだった。木製の椅子はずいぶん使いこまれているようで、手すりや背もたれは飴色あめいろに光っている。ただ、誰かが座っているのを見たことは一度もなかった。

ここに来るたび、座ってみたいと思っていた。夕方の廊下はひっそりとして人気がない。

——いまなら、座れるかも。

短靴たんぐつを脱いだわたしは揺り椅子に近づき、手荷物を床に置く。そっと腰かけると、椅子は穏やかに前後に動いた。誰も通りかからな

いのをいいことに、しばし、心地よい揺れに身を委ねた。ゆつたりとした揺れは、余市湾のさざ波を思い出す。目を閉じると、まなた 瞼の裏に藍色の海が浮かんできた。

北海道に帰ることは生涯ないだろう、なんて思っていたけど、わたしは意外と故郷が好きだったのかもしれない。

今年の夏で、東京に出てきて二年になる。外面的にはずいぶん変わった気がする。眼鏡を常用するようになり、着物はほとんど着なくなつた。東京の地理にもいくぶん詳しくなり、市電の停留所で右往左往するようなことはなくなつた。

けど、文学を志す人間としては、進歩したとは言いがたい。

昨年〈昆虫〉を書いて以後も、細々とだが詩は書き続けていた。だが伊藤さんに拒絶されて以来、人には見せていない。百田さんの反応と合わせると、どうもわたしの詩は型破りな、言い換えれば恥知らずな代物であるらしかった。すっかり人に見せる気は失せ、百田さんからせつつかれるたび、翻訳が忙しくて、などとごまかした。

ゆらゆらと、身体が揺れている。まるで海のなかに放りこまれたようだった。寄せては返す波に揺られ、身体の芯がふわりと浮き上がる感じがする。

伊藤さんが、わだほりちやう 和田堀町の元いたアパートから、筋向かいのこのアパートに引っ越したのは昨秋だった。しつこく理由を尋ねたが、伊

藤さんは毎度、困ったように眉をひそめて苦笑した。

——飽きたただだよ。それに、こっちは新築だから。

端はなから騙す気がないのかと思うほど、いいかげんな嘘だった。それが見抜けないほどこっちも初心うぶではない。

転居したのは、女の人と住むためだ。

兄が結婚してからこちら、週に二、三度は伊藤さんの部屋に来て
いる。それだけ部屋にいれば、伊藤さんの目を盗しよかんんで書簡を読むのは難しくなかった。大事な手紙はどこかにしまっているようだが、座卓や床に置きっぱなしのこともたびたびある。わたしは相手の名前に注意して、女性からの手紙を選んで目を通した。

もっとも怪しいのは、小川貞子おがわさだこという人だった。昔の手紙を読んだが、彼女も『雪明りの路』を読んで伊藤さんに興味を持ったようだった。わたしに読めるのは貞子さんの文面だけであるから、伊藤さんがどう思っているのかは不明だ。ただ、やり取りが長期間続いていることから、伊藤さんも憎にくからず思っているのだろうと知れた。

他にも伊藤さんは、幾人かの女性いくにんと並行して文通をしていた。いずれも、文人としての伊藤整に惹かれ、連絡を取ってきたようだ。

伊藤さんが誰を選ぶのかはわからない。ただ、転居が女生どうとの同棲せいのためであることは確信していた。でなければ、こんなに近い距離で、新築の広い部屋に引越す理由が説明できない。

それでも焦りはなかった。なぜなら、その女性たちに文学的素養があるとは到底思えないからだ。伊藤さんの詩を読んでわざわざ手紙を寄越してくるような女は、端からわたしと同じ土俵に立っていない。

小川貞子はもしかしたら美しく、気立てがよい女性なのかもしれない。ひよっとすると、伊藤さんの妻になるかもしれない。

けれど、そこまでだ。

たくさんの文通相手たちは、誰ひとりとして、伊藤さんから文学の手ほどきを受けている様子がなかった。伊藤整が己の文学を伝授しようとする女はただひとり、このわたしだけだ。〈文芸レビュー〉への出入りを許され、誌面に名前が載っている女は、わたししかないのだ。

わたしと伊藤さんは、見た目や性格なんて浅いところでつながっていない。もっと奥深い、取り返しのつかない場所で、わたしたちは共鳴している。

〈つづく〉